

『養豚市場の危機』

著者：ワイピーテック

編集：営業部 菅原美里

飼料費の値上がり、豚肉消費の減少予測

今年の1月以来、飼料価格は上昇し続けています。7-9月飼料価格は平均で4,500円上がり、1月からであれば15,000円位上がったこととなります。生産者の皆様はそれに耐えているのでしょうか？または何らかの手を打っているのでしょうか？

単純に豚価格と飼料の値上がり分だけを計算してみると、まだ利益が出ているように見えます。しかし、農水省の生産、消費の予測を見ると、夏場に向かってやや落ちるようです。ということで、豚肉の相場も高値安定ですが、高すぎれば、輸入が増大するか、家庭消費が減少するでしょう。

この傾向は世界中で起こっているようで、穀物大生産国であるアメリカでも飼料費が60%も上がり、何らかの手を打たなければならないとしています。中国でも、南北アメリカのトウモロコシだけでは頼れないということで、ロシア、ウクライナの麦の買い付けに入っています。世界中の畜産生産者（会社）が穀物の買い付けに入るとすることで、穀物価格が下がることは望めません。また、蛋白飼料に関しても大豆、カノーラ（菜種）などが急に増えるとは思えないことと、アメリカの干ばつの問題で、今秋の収穫量も気になるところがあり、相場も高値安定となる見通しです。

腸管の健康を保つ

穀物、大豆、カノーラ（菜種）価格が高値をいっており、衛生管理などが十分であれば、多少の飼料費の値上げに耐えられると思いますが、それ以外は厳しくなるでしょう。では、何らかの手立てはあるのでしょうか。

まず、飼料費が下がらないなら、飼料効率を上げる必要があります。また、穀物の品質のブレ（エネルギー、蛋白質含量）があるために、今まで以上に効率を考えなければなりません。

第一に行うべきことは、豚の腸を健康に保つことでしょう。これにより、十分に消化、吸収してくれることとなります。このことは、周知のとおり、離乳時から行っていなければなりません。健康は突然得られるものではありません。肉豚は5か月前後で出荷するために、やはり離乳前後のトラブルを最小に留めておく必要があります。

欧州では養豚飼料への抗生物質の飼料添加が禁止され、酸化亜鉛も禁止される方針です。東南アジアでも抗生物質の飼料添加が禁止されつつあります。また、欧州での人件費は日本より高いですが、生産費は日本より低いです。何故でしょうか？いろいろな回答があると思いますが、離乳前後の腸の健康が良いことが一番多い回答であると思われます。次に考慮することは消化率です。

自然に腸の健康が得られ、消化率が上がっているとは思えません。また、世界中ほぼ同じ品種（系統）の豚が用いられているので、栄養管理に関しても大きな差があるとは思えません。多くの生産者は、子豚期に飼料添加物にお金を払っても、腸の健康、消化率が得られれば、最終的に利益が出る（出ている）と考えています。ニュースを見ていると多くの生産者は有機酸、消化酵素（特に蛋白質分解酵素）、そして腸の健康を促すであろう添加物（科学的に立証されているもの）を使っています。決して安価なものではありませんが、離乳前後の飼料摂取量はまだ、肥育豚、繁殖豚に比べると少ないために、費用的にもまかなえています。

飼料価格と豚価

出荷体重	120.0kg
肥育豚飼料要求率	2.6
枝肉重量	80.0kg
飼料価格上昇分	15.0 円/kg
飼料必要量	296.4kg
飼料費（値上がり分）	4,446 円/頭
豚価（東京：上物）	
1 月 20 日	472 円/kg
6 月 21 日	610 円/kg
1 月売り	37,760 円/頭
6 月売り	48,800 円/頭
差	11,040 円/頭
利益	6,594 円/頭

資料：著者, 2021年

まわりの世界に目を向けて

また、養豚だけではないですが、畜産関係者として見ておかねばならないのが、フェイクミート（代替肉）などです。最近、大手スーパー、コンビニでも大豆由来の肉類が売られています。味も日本で開発されているので、相当のもんです。それらは最近はやりの「サステナビリティ（持続可能性）」も謳っています。このサステナビリティ、SDGsにも十分目を向けなければならないでしょう。畜産には関係なしでは済まされない時期になっています。

今年の日本は世界から目を向けられています。当然、食に関しても多くのレポートが世界を行き来すると思われ、動物福祉に関しても出てくるかもしれません。すでに養鶏ではケージ飼いはいけないとの声も聞こえることもあり、もし日本で放牧養鶏となると、今の生産量の25%となり、価格は4倍になる計算があります。養豚では、妊娠豚は群飼、分娩豚房も母豚が動けるようになると、生産頭数が激減するでしょう。

ネット社会が始まり、瞬時に世界の情報が飛び交う時代です。養豚生産者の方も、自分の豚のみに手いっぱいにならないよう、時間を作って色々な情報を手に入れ、自分のものを確立していきましょう。消費者が望んでいるのは、本当の意味での安全、安心であるでしょう。



資料：外務省HPより

